

風姿花伝第六、  
花修云

二

作者の思ひ分くべき事

一、作者さくしやの、思おもひ分わくべき

事あり。只管ひたすらしづ静かなる素材もとぎ

の音曲おんぎよく計ばかりなると、又、

舞まい・働はたらきのみなるとは、

一向むきなれば、書かきよき物もの

なり。音曲おんぎよくにて、働はたらく能のうあ

るべし。これ一大事也。真しん

〔口訳〕

能作者の十分なる分別を必要とすることがある。能を作書するに当つて、只管に静かな、働きの少ない素材の曲で、音曲的效果ばかりをねらふ曲や、又舞や働ばかりを中心とした曲などは、何れも、その中心が、音曲或は舞働といふやうに、一面的（一元的）であるから、比較的作書は容易である。所が、音曲で以て舞働をする能（音曲・働の二元融合的な能）がある。これは中々容易でない。そして、真実面白いと、感歎渴仰する能は、この種のものであるのだ。見物人の耳にひびく文句

実、面白しと、感を成すは  
是也。聞く所は耳近に、面  
白き言葉にて、節の懸かり  
良くて、文字移りの美しく  
続きたらんが、殊更、風情  
を持ちたる詰めを嗜みて書  
くべし。この数々相応する

所にて、諸人一同に感を成  
す也。

去る程に、細かに知るべき  
事あり。風情を博士にて音  
曲を為る為手は、初心の所  
なり。音曲より、働きの生  
ずるは、劫入りたる故也。

は、人口に膾炙して居て理解し易い面  
白い詞章であり、しかも節まはしの趣  
きも良く、語路文字移りが美しくつづ  
けられてゐる曲で、特に一曲のやま（眼  
目）の所に面白い振りや動きのあるや  
うにと、十分に研究して書くべきであ  
る。これ等の諸条件がうまく相応する  
所で、見物人が一斉に深い感動をうけ  
るものである。

それで、作者として、詳細に知悉す  
べき事項がある。演能に際して、舞台  
上の振りや動きといふことを規矩標準  
として音曲をする為手は、まだ初歩  
の程度の者である。音曲の中から、振  
や動きが生れて来るといふのは、年劫  
をつんだ結果である。音曲は耳に聞く  
所のもの、風体は眼に見る所のもので  
ある。而して、一般的な道理から考へ

音曲は、聞く所、風体は、見る所也。一切の事は、謂れを道にしてこそ、万の風情には、成るべき理なれ。謂れを現すは、言葉なり。さるほどに、音曲は体なり。風情は用なり。然れば、音

ると、一切のことは、そのいはれ、意味を根柢とし、それを姿にあらはしてこそ、万の風体といふものが生れるのが常道である。そのいはれを現はすものは謡の文句であるから、能に於ては音曲が体であつて、それから生れる振りや動きは、その体の用ともいふべきものである。それで、音曲から振りや動きの生れるといふのは、順であり、振りや動きを本体として音曲をするといふのは逆といふべきである。諸道諸事に於て、順逆といふ風にこそ進むべきで、逆順といふ行き方は無い筈であ

曲より働きの生ずるは、順也。働きの音曲を為るは、逆なり。諸道諸事に於いて、順逆とこそ下るべけれ。逆順とは有るべからず。返々、音曲の言葉の便りをもて、風体を彩り給べき也。

る。だから、返す返すも、うたふ音曲の言葉を以て、その振りやはたらきを彩るやうにすべきである。かくすることが、所謂「音曲・働き一心になる」境地への稽古である。

これ、音曲、働き、一心に  
成る稽古なり。

去る程に、能を書く所に又  
工夫あり。音曲より、働き  
を生ぜせんが為、書く所  
をば、風情を本に書くべし。  
風情を本に書いて、さて、

その言葉をうたふ時には、  
風情自ら生ずべし。しかれ  
ば、書く所をば風情を先立  
て、しかも、謡いの節懸  
かり良き様に嗜むべし。さ  
て、当座の芸能に至る時は、  
又、音曲を先と為べし。か

以上のべたやうな訳であるから、能  
を作書するに当つて、工夫すべき事項  
がある。それは、音曲から働きが生  
れるやうにする為には、作書に当つて、  
役者の演技といふものを目標基本にし  
て詞章を書くべきである。演技を基本  
として作書せられた能であれば、其の  
詞章を謡ふ時には、その音曲から、伎  
といふものが自然に生じて来る筈であ

る。それで、書く際には、舞台上の伎  
といふものを主眼として書き、しかも、  
謡の節かかりの良いやうにと研究して  
作書すべきである。而して、演能の場  
に臨んでは、又、音曲を主眼として、  
それから伎が生れるやうに演ずべきで  
ある。かやうに研究工夫して、稽古の  
年劫を積むならば、謡ふも伎、舞ふ  
も音曲といふ、謡と伎と一如の境地に  
到り得て、所謂万曲一心といはれる達  
人となることが出来よう。これは又一  
面より見れば、さうした能を作書し  
た人の功名でもあるわけである。

やうに嗜<sup>たしな</sup>みて、劫<sup>こう</sup>入りぬれ  
ば、謡<sup>うた</sup>ふも風情<sup>ふぜい</sup>、舞<sup>ま</sup>ふも音<sup>おん</sup>  
曲<sup>ぎよく</sup>になりて、万曲<sup>ばんきよく</sup>一心<sup>しん</sup>たる  
達<sup>たつ</sup>者と成<sup>な</sup>るべし。これ又作  
者の功名<sup>かうみやう</sup>也。

---

〔評〕

此の段は、前段をうけて、能を作る上のコツを説いたもので、主として、

音曲とわざとの交渉関係をねらつた注意である。能の中には、音曲的  
効果を中心にして作られた曲もあれば、又舞台上に於ける舞や働きを  
見せる事を中心として作られた曲もある。一方は聴覚上の美感で見所  
を恍惚たらしめやうとするし、他方は、華やかな舞台面の動きで見物  
の心をつかまうとするものである。そして世阿弥に言はせると、かや  
うな一方的な効果だけをねらふ能は作り易いものであるといふ。つま  
り、ねらひ所が一つであるから、単純であり苦勞もいらなないといふ意で  
ある。

これ等に比べると、「音曲にて働く能」は中々むづかしい。それは音曲の中から働きが生れるやうに作らねばならない。つまり、音曲と舞働きが融合一如の境になつて居なければならぬ。見物としてはかやうな能に於て真実面白いと感心するのである。眼も楽しみ耳も楽しみ、それが同時に見物に与へられるのであるから、見物としては満足この上もないものである。

かやうな能を書くためには、詞章は人口に普く膾炙してゐる面白い文句で、それを音曲的なフシ面白く、謡ひがなめらかに流れ下るやう

に作曲し、且つ一曲のヤマともいふべき所には、特殊なわざの面白さがあるやうに作るべきであるといふ。かやうな作の条件が具備せられて、はじめて見物一同が感嘆する能となるのである。

以上は一般的な顧慮であるが、世阿弥は更に細密な秘事に筆を進めてゆく。それは演能に於ける「音曲」と「働き」との相関論、本末論である。その為に先づ能の役者の演出のやり方に対する吟味が始まる。先づ、舞台上の動きや伎わざ、換言すれば目に見える動作を中心とし、それを標準として謡ひをうたふ役者は未だ初心者はつしやうの境である。それに比

べて音曲を中心としつつ、その音曲の風趣から伎<sup>わざ</sup>が生れ働きが出るやうな演じ方をする役者がある。これは所謂練達の士であると世阿弥は断定して居る。何故に、かやうな断定が生ずるか、それを考へるのが第二の吟味となる。

それは、「一切の事は、い、わ、れ、を道にしてこそ、よろづの風情にはなすべき理なれ」といふのが眼目である。「謂れ」を現はすものは、謡の文句である。その文句を聞かせるのが音曲である。音曲的に美しく謂れが語られ謡はれる時、見物人はその曲の心を知るのである。その心

が知れなければ、動作の示す心もわからない。従つて、音曲が能の本体をなすもので、それから動作が生れ出るのだから、「音曲は体也、風情は用なり」といふべきである。体、あつての用であるから、音曲から風情はたらきが生ずるのは順であり、風情働きで以て音曲をするといふのは逆である。後の花鏡に「先づ聞かせて、次に見せよ」といふ注意がべられてゐるが、これはこの順逆の道理を明かにしたものである。それで、演ずる者の心得としては、「謡ふ文句の意味や風趣で以て、風体や伎<sup>わざ</sup>に風情あらしめるやうにする」といふことが第一の要件となるのである。演者の立場としては、「音曲より風情が生ずる演じ方」が眼目であ

る。しかし、能の作者としては、そのやうな演じ方が出来るやうな能を作ることが眼目である。作者としては、文句を綴り謡曲を書くには、舞台上のシテの動作・はたらき・わざを本として、さうしたは、た、ら、き、が生れるやうに文句を綴るべきであるといふのである。舞台上のは、た、ら、き、を考へない曲なら、それはただ謡ひものとしてのみの価値しかなく、全く能の詞章としての価値は無い。舞台上に於て、シテの面白い働きの生れるやうに綴られた文章を謡ふならば、その音曲から自然に働きの生れて来るわけである。で、作書者としては、「風情を先立てて、しかも謡のふしかかりの面白いやうにと研究すべきである」といふなければならぬのである。

この考へ方は、実に巧妙である。舞台を知らぬ作者の作つた脚本は、結局レーゼドラマに終るといふのは、此頃もやかましく言はれる処である。舞台に精通し、役者の伎や個性に合ふ脚本でなくては、成功しない。その点で、世阿弥のやうに、自分が役者と作者を兼ねた者は鬼に金棒の強さがある。

かやうにして作られた能を、実際に演ずる際には、音曲を先とし、



体として、風情を音曲より生ぜしめるやうに演出する時に、はじめて「謡  
ふも風情、舞ふも音曲」といふ二者一如の妙境があらはれ、万曲一心  
たる達者になり得るといふのである。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著